あいのその　2022年6月号

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。（使徒言行録１章８節）

愛の園保育園　042-325-1045

キリスト教会では、今年は６月５日にペンテコステを迎えます。2000年近く前のこの日、天から「聖霊」が降り、イエスなきあとの弟子たちにその力が与えられて全世界へと遣わされて各地で教会がつくられ、キリスト教が広まっていきました。ペンテコステはイースター、クリスマスと並ぶキリスト教の三大祝祭のひとつであり、教会にとってとても大切な日です。しかしイースターやクリスマスに比べると、一般的にはほとんど浸透していないと言えるでしょう。それは聖霊が降ったと言われても、なんだかよくわからないからではないでしょうか。「霊」という文字が言葉に入ると、日本的にはどうしても「幽霊」「亡霊」「背後霊」などといった言葉が思い浮かんでしまうからかもしれません。

しかし聖書の語る「霊」「聖霊」というのは、オカルト的な現象を指しているのではありません。中世ヨーロッパの神学者トマス・アクィナスという人は、かつて「“愛”こそが聖霊の本来の名である」と言いました。聖霊とは、私たちに愛とは何かということを気付かせるための神の力、助けであるというのです。聖書においても、霊とは愛であり喜びであり、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制であると言及されています。これらは総じて、私たち人間にとって願わしいもの、欲するものです。そしてまた、イエス・キリストと弟子たちが世に宣べ伝えていった事柄でもありました。

弟子たちは一度はイエスを裏切り見捨てた人々です。常識的に考えれば、神の言葉を伝える者としてはふさわしくないと思えます。しかし、だからこそそこに聖霊が降ったのだと聖書は語るのです。今月の聖句は、意気消沈していた弟子たちに復活のキリストが語った言葉です。弟子たちは決して彼ら自身の力ではなく神の愛によってこそ立ち上がることができた。そして、自分たちに及んだこの神の愛を、自らの体験をもとに世に伝えていった。そうして教会がつくられていったのだというのです。

私たちは神さまのことも、聖霊のことも目で見ることはできません。しかし、愛や赦し、平和というものもまた目で見たり手でつかんだりできるものではありませんが、私たち人間にとって、それなくしては決して生きられないものです。同じように、聖霊の力もまた私たちにとって、それなくしては生きられないものです。背後霊ではなく私たちの背後でいつも支えてくださっている神さまの存在が、私たちの生きる希望だからです。

（牧師　西脇　正之